

肝細胞の脂肪化は、肥満、過栄養、飢餓などのほか、種々の薬物でも起こり得る変性所見である（図8-組織画像）。

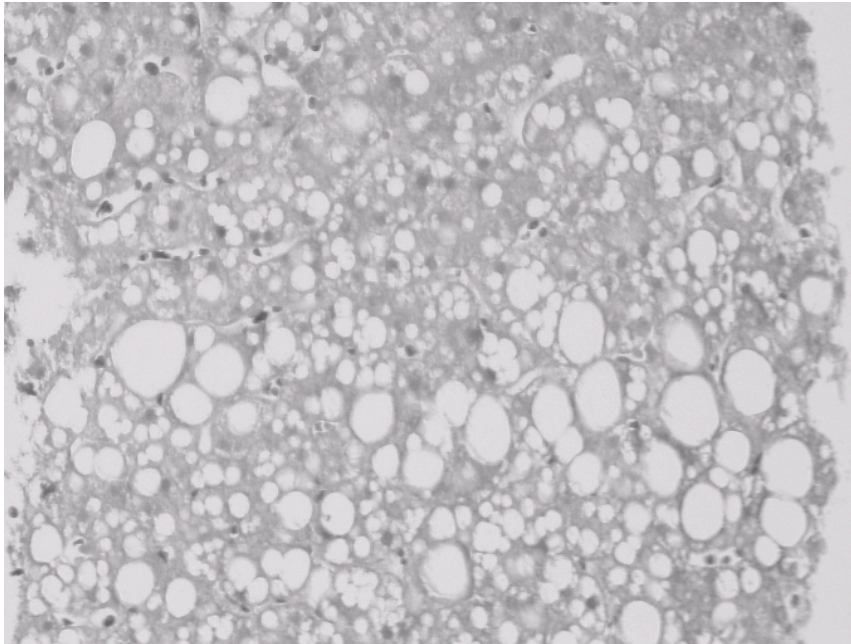


図8 大小の脂肪滴による肝細胞の著明な脂肪化を認める。

肝脂肪化には大脂肪滴と小脂肪滴によるものがあり、原因薬物としては、前者はアルコール、メトトレキサート、副腎皮質ステロイド薬など、後者はテトラサイクリン系抗菌薬などがあげられる。脂肪化はパラフィン包埋による標本では空胞化として捉えられるが、正確な脂肪の証明には Sudan Ⅲ染色などを行う必要がある。慢性の脂肪化の多くは大滴性で、アルコール、副腎皮質ステロイド、メトトレキサートなどが原因薬物として知られている。近年、組織学的にアルコール性肝炎類似病変を呈する非アルコール性脂肪肝炎（nonalcoholic steatohepatitis: NASH）が注目されているが、同様の病態を惹起しうる薬物としては、アミオダロン、タモキシフェンなどが報告されている。これらの薬物は潜在性 NASH を顕在化させることもある。

マロリー体（Mallory body）は、アルコール性肝炎でよくみられ、慢性胆汁うっ滞、NASH、肝細胞癌でも認められる、肝細胞変性に伴って肝細胞質内に認められる好酸性の細胞内封入体であるが、種々の薬物性肝障害でも認められる（図6-組織画像）。

これらの変性・壊死は、原因薬物によっては、肝小葉の特定の領域に分